

成語として辭書には見當らない。心髓、眞精神、眞情といふ程の意。

【大本領】 ダイホンリヤウ 最も根柢的な本質。最も根本的な本来の特色。

【本領】 は(一)特色。本質。(二)もとからの領地。本地。(三)領地として賜はること。こゝは(一)

【據べる】 ノべる 音は「チヨ」のべひらく。のべしく。

【金誠】 キンカイ 貴いいましめ。

【士規七則】 シキンチソク 安政二年正月野山の獄中から従弟玉木彦介(文之進の嫡子)の元服に際し贈つたもので、立志、擇交、讀書の三事に對する松陰の所信を概括したものであるが、松陰の國體に對する原理的信念を簡明直截に表現したものと注目すべき文献であり、又松門の金科玉條として廣く人口に膾炙されてゐる。(一六四—一六五頁挿繪及び參考欄參照)

【質實】 シツジツ 飾りけなくまことなこと。士規七則の第四則に、「士行、以質實不欺爲要、以巧詐文過爲恥、光明正大皆由是出」とある。

【義勇】 ギユウ (一)正義と勇氣。(二)正義に基づいた勇氣。(三)君國の爲に一身を犠牲にすること。こゝは(一)士規七則の第三則に、「士道、莫大於義、義因勇行、勇因義長」とある。

【斃れて已む】 タフれてヤむ 死に至るまで努めてやま

い。死ぬまでは屈しない。

士規七則の第七則に「死而後已四字、言簡義該、堅忍果決、確乎不可拔者、舍是無術也」とある。

【尊王攘夷】 ソンワウジヤウイ 王室を尊び外國人を逐ひ拂つて國內に入れないこと。

【攘】 は逐ひのける・排去する等の意。「夷」は、こゝは外國人の意。

「尊王攘夷」の語は幕末王政復古を目的とする勤王志士の間に唱へられた標語であるが、もと「尊王論」と「攘夷論」とはその發生の由来を異にしてゐる。しかし同じく尊内卑外の思想である點に於て結合し、兩者に對する幕府の彈壓の加はると共に何時か討幕運動の標語となり、殊に攘夷は時として幕府を窮地に陥るゝ爲の手段の如くにも用ひられるに至つた。

松陰は兵學研究の結果弱冠より海防の要を説き、進んで海外渡航も企てた位で、彼の思想は決して鎖國的ではなかつた。然し彼は國家の自主獨立の精神から、當時威迫し來つた外夷の前に屈服的外交に甘んずることは斷然これを排撃したのであつて、この精神から松陰は矢張攘夷論者だつたのである。

【一呼、虎嘯き、一吸、龍躍る】 一呼に應じて虎が咆哮し一吸に應じて龍が騰躍するといふ意で、門下の逸材高足を虎・龍に譬へ、松陰の唱道鼓吹に應じて、それ等門弟

子が興起・活躍したことをいつてゐる。

【一呼・一吸】 (イツコ・イツキフ) 「呼」ははく息、「吸」はすふ息。唱道鼓吹の言々句々を呼吸に譬へて對句にしたのである。

【虎・龍】 (トラ・リュウ) 易經に「雲從龍、風從虎、聖人作、而萬物覩」とあるより、龍虎は屢々對句的に用ひられてゐる。

【嘯く】 (ウツブく) (一)口をすぼめて聲を出す。(二)長く大きな聲をだす。(三)詩歌を歌ふ。くちずさむ。(四)吼える。こゝは(四)

【主觀的】 シュクワಂತキ 客觀的の對。自己の好惡・判斷・主義等を本位とするさま。自己の意識を基準とするさま。

【主觀】 は Subject (英) の譯語。知覺し、思惟し、意識する主體。

【才】 サイ (一)心の、事をなすはたらき。才氣。(二)賢い人。こゝは(一)

【器を成す】 ウツハをナす 人材を養成する。人物を育成する。

【器】 は一六一頁「棟梁器」參照。

【己が欲する所を以て人に施せしもののみ】 自分の欲求する所を以て人に與へたまでのことである。論語、顔淵篇に「己所不欲、勿施於人」等とある。

【己を以て人に強ひしのみ】 己の信念・主張を強制的に人に實行させただけのことである。

【熱血性】 ネットケツセイ 事に激昂し興起し易い性質。

【熱血】 (一)體熱の未だ去らない生血。(二)興起した意氣。熱烈な精神。こゝは(一)

【献身的】 ケンシンテキ 身をささげてつくすさま。自己の名聞利益に一顧もくれず盡力するさま。

【己を以て人に強ひしのみ。而して其の強ひらるるを覺えしめざりしは、彼の熱血性と献身的精神とによるのみ】

「唯己が眞骨頭大本領を據べて以て之を他に及すのみ」であつた松陰の教育の態度と、その感化力のよつて來る根源を述べてゐる。その旺盛な感化を、わざと「強ひ」と言つた所にその特質が遺憾なく道破されてゐる。彼の熱血性と献身的精神とはつまり天成の精神的爆裂彈たる彼の本質の一端であつて、強ひる人も強ひられる人もそれを覺えず、批判論評を超越してゐる所に、松陰の面目が躍如としてゐる。

【師を以て自ら居らず】 師としての地位に自分からとどまらぬ。少しも師匠ぶらない。

松陰はその門下生を呼ぶにも常に「諸友」又は「同志」を以てした。

【彼の眼中師弟なくして唯朋友あるのみ】

松陰が眞に偉大な教育家たり得たのも此の故であり、松

下村塾に於ける師弟の情が、やがて血脈相承の關係にまで進展し得たのもこの故である。「感在知己」とは蓋しこの關係をいふのであらう。

【年齒】 ネンシ ヲハヒ。年齡。

【齒】 はこゝでは「齡」の意。

【天性】 テンセイ 天から受けた性質。うまれつき。

【彼が天性然るべきものなり】 彼の天賦の性質がさうあるべき傾向を持つてゐたのである。

【願ふ】 オモふ かへりみ思ふ。

【彼が骨冷やかなる後】 松陰の死後。

【涕】 ナミダ

【松陰先生を説く】 尊敬・思慕の情をもつて松陰の人格・德行・感化力等を述べた。特に「先生」の語を添へたのは、弟子の景慕の情を表したのである。

【節慨】 セツガイ 節義をたてとほす意志。氣節。氣概。氣骨。

【活題目】 クワツダイモク 生きた問題。實際に價値のある問題。

【題目】 は、(一)標題。表題。(二)問題。條件。(三)名目。名號。こゝは(二)

【東坡】 トウバ 蘇東坡。支那宋代の詩文の大家。(八・影三九頁末行既出)

【留侯論】 リウコウロン 「唐宋八家文讀本」所收の論とし

て人口に膾炙せるものの一で、眞の豪傑は人の忍び得ぬ所を能く忍ぶものであるとなし、圯上之老人が留侯に太公望の兵法奥儀書を授くるに就いての說話は、老人が張良に「忍」の一字を教へたものであることを論じ、最後に張良の狀貌・事跡について「忍」の效驗の顯著なるものを指摘して文を結んでゐる。

【留侯】 は漢の高祖の臣張良。留に封ぜられたので留侯といふ。(前課一五七頁一〇行既出)

【其意不在書】 ソノイシヨニアラズ 黄石公の眞意は、その授けた奥儀書そのものにあるのではなく、よく「忍」の精神を體得させる所にあつた。

【活事實】 クワツジジツ 生きた事實。假想ではなく、現實に存在する事。

【和親】 ワシン (一)和らぎ親しむこと。親睦。(二)國際間の親睦。國と國との修好。こゝは(一)

【米國より和親を申込みり】 (一)嘉永六年六月米國の東印度艦隊司令官ペリー (Matthew Calbraith Perry) は政府の意を受け、軍艦三艘を率ゐて浦賀灣頭に現れ、和親修交を求めた。その要求は平和的であつたが、態度は頗る示威的で、幕府當局は固より全國の士民に少からざる衝擊を與へた。彼の要求に對して幕府は來年を約して事を遷延せしめたが、翌安政元年正月ペリーが再び八艘の艦船を率ゐて來り迫るに及んで、遂に日米和親條約を

締結し、次いで英・露・蘭三國とも同様の條約を結ぶに至つた。(一)然るに安政三年米國總領事ハリス (Townsend Harris) の著任と共に、更に進んで通商條約の締結を迫つたので、安政四年末幕府はこれが可否を諸侯に諮詢し、又習年早々老中堀田正睦を上洛せしめ、勅裁を仰ぐに至つた。この事は既に激成しつゝあつた攘夷を衝擊して、朝野の論議は益々喧しくなつた。こゝでは「和親を云々」とあるが、(一)は松陰の松下村塾に關係する以前のことであるから、寧ろ(二)の場合をさすのであらう。

通商條約問題についての松陰の反對は「狂夫之言」所載の藩主に對する建白書にみても明な如く、極めて強硬であつた。即ち松陰は受動的屈辱的態度の不可、平和的假装せられたる米國の侵略的意志に對する疑懼、自由貿易に伴なふ財政經濟的危險、拜外思想の助長、内政干渉の誘致等の理由から通商條約の不可を極論してゐる。

【大詔】 タイセウ 「みことのり」の敬稱。

【煥發】 クワンパツ 廣く盛に天下に發布せられること。

(詔令を布くのにいふ。)

【攘夷の大詔煥發せり】 (一)嚮に和親條約の際には嘉納あらせられた朝廷も、通商條約に就いては、朝議既に攘夷に決してゐたために許し給はず、老中堀田正睦が再三の奏請に對し、安政五年三月二十日今一度三家諸大名の心

を竭くした建言を聽いて奉答せよとの詔勅が下つた。これをきいた松陰は直ちに「松下村塾策問」を草し、萬一藩主より下問を受けた場合に如何に答ふべきやと知友門生の覺悟を促し、また藩主に對しては、宜しく「天勅不可不奉也、墨夷不可不絶也、如是而已矣」と答言せらるべしといひ(對策一道)、後幕府の違勅調印の事を聞くに至つては「是征夷之罪、天地不容、神人皆憤、準諸大義、討滅誅戮、然後可矣、不可不有也」(議大義)と激語痛論してゐる。

(二)然るに、幕府は滔々たる攘夷の大勢と、朝廷からの屢々の督促とに抗し難く、文久三年四月二十日家茂上書して攘夷期限を五月十日と定める旨奉答したので、直ちにこの旨列藩に勅し、幕府もこれを諸藩に布達した。世に「攘夷の大詔」等いふ場合は、多くこの攘夷令をさすのであるが、これは松陰歿後の事であるから、こゝは(一)と見るべきであらう。

【革新】 カクシン 組織をかへて新しくすること。舊習をすてて新しくすること。

【運動】 ウンドウ こゝでは、ある目的を達する爲に奔走盡力すること。

【本部】 ホンブ 中心の位置に立つ部局。中樞の部局。

【評議】 ヒヤウギ 意見を交換して議すること。集つて相談すること。相談。

【境界】 キヤウカイ さかひ。區域。

【今日學ぶ所即ち今日の事にして、今日之を行ふを得べくまた行はざるべからざるの責任を有す】

「有<sup>レ</sup>民人<sup>ニ</sup>焉。有<sup>レ</sup>社稷<sup>ニ</sup>焉。何<sup>レ</sup>必<sup>ズ</sup>讀<sup>シ</sup>書<sup>ヲ</sup>、然後<sup>ニ</sup>爲<sup>シ</sup>學<sup>ト</sup>」  
(論語先進篇)とは孔子の言である。學問が常にかくあるべしと要求せられてはならないとしても、學問の終局の目的は此處に歸せらるべきであり、ある意味で眞の學術はこゝに成立の基礎を置くべきものと考へられる。而してこれこそ學問の概念化遊戯化煩瑣化を防ぐものでありかくの如き學問こそ人間を鼓舞し更新するものである事も亦事實である。天威の鼓吹者であつた松陰の學問がこの方向をとつた事は當然であり、その偉大な感化力はまたこの學問に負ふ所が大きかつたのである。

【師範】 シハン (一)師となり、範となること。手本。模範。(二)學問・技藝・武術等を教授する人。師匠。こゝは(二)

【道場】 ダウヂヤウ 梵語 Bodhimandua の譯語。(一)釋迦の聖道を成じた所。即ち中印度、摩竭陀國、尼連禪河畔菩提樹下の金剛座。(二)轉じて、佛道を學ぶ所、佛を供養する所。(三)轉じて、武道を稽古する場所にもいふ。こゝは(三)

【眞劍】 シンケン (一)竹刀又は木刀に對して、眞の刀の意。(二)まことの刀劍で闘ふこと。轉じて戯れでなく

眞實なこと。本氣。こゝは(一)

【久坂玄瑞】 クサカゲンズキ  
教科書に「高杉晋作」とあるは「久坂玄瑞」の誤であるから訂正せられたい。因みに本課摘録の書面は安政五年六月二十八日附在萩の松陰から江戸の玄瑞あてに送られたものである。

「久坂玄瑞」名は通武、後に義助、字は玄瑞又は實甫、號を湖秋・江月齋といつた。天保十一年長州藩寺社組醫師良迪の次男に生まれ、少くして父母と兄とを失ひ家督を相続した。安政四年(十八歳)松門に投じ、高杉晋作と松門の雙璧と稱せられ、深くその英資を愛せられた。その暮松陰の妹壽子を娶り、杉家に同居し、久保清太郎富永有隣と共に松陰の教育事業を輔けた。五年一月江戸遊學の藩許を得て東上したが、後京都に出て大原三位・梁川星巖・梅田雲濱等と交り、再び江戸に出て蘭學を學び、六年二月歸國、藩の西洋學所官費生となつた。松陰の再獄から刑死に至る前後、最も苦慮奔走につとめ、又その遺志繼承の念篤く、屢々同志を村塾に會してその指導に任じた。萬延元年四月英學研究の爲三たび江戸に派遣され、文久元年末歸國、翌二年高杉晋作以下同志二十五名と攘夷血盟書を作り、十二月品川御殿山英國公使館を焼打して攘夷の氣勢を擧げた後、水戸に遊び、信州に佐久間象山を訪ひ、京都に入つて種々畫策し、攘夷即行

の氣勢を醸成するに最も力があつた。四月同志と共に下關に赴き、光明寺黨(奇兵隊の條参照)を組織して奮戦し、後再び上洛して男山八幡行幸攘夷親征の事等に奔走した。八月朝議一變長州藩は京都警衛を罷められ、元治元年「蛤御門の變」に入江杉藏等と共に軍議に與つたが流彈に當り再起不能を知つて自刃した。享年二十五。明治二十四年正四位受贈。

【書中】 ショチュウ 手紙の中。この「書」は書簡・書面の書。

【隔日】 カクジツ 一日づつ隔てること。一日おきに。

【左傳】 サデン 「春秋左氏傳」の略稱。「左氏傳」ともいふ。三十卷。「春秋」の註釋書で、春秋三傳(左氏・穀梁・公羊)中歴史的事實を明にしてゐる點を特色とし、「春秋」の背後の史實を探究する上に重要な文献たるのみならず上代に於ける政治・社會・經濟等に豊かな資料を提供するものとして大きな價值を有する。作者に就いては「漢書」には魯の太史左丘明の編としてゐるが、後世若干の異説も行はれて、未だ定説とすべきものはない。

「春秋」は、五經の一。孔子が史官の手になつた魯史に筆削を加へたもので、魯の隱公の元年(皇紀前三十年)から哀公四年(皇紀一八〇年)に至る十二公・二百四十年間の事蹟を編年體に記し、時弊を慨歎して褒貶の意を寓したものである。本書に表れた大義名分・尊皇賤霸の思想

は、永く後世の政治思想を支配し、我が國に於ても「神皇正統記」「大日本史」「日本外史」等に影響を及ぼし、皇政維新の一原動力ともなり、國民道德の確立に貢献したところが少くなかつた。

【八家】 ハツカ 「唐宋八大家文讀本」の略稱。「唐宋八大家」ともいふ。清の沈德潛の編纂。支那文學史上の黄金時代といはれる唐・宋二代に於ける代表的文人、韓愈・柳宗元・歐陽脩・蘇洵・蘇軾・蘇轍・曾鞏・王安石の八家の文章を選録したもので、三十卷から成る。

大體明の茅坤の選にかゝる「唐宋八大家文鈔」「唐宋八大家類選」等に基づき、更に八家の全集に據つて拔萃したもので、もと初學者の讀本たることを目的としたために、毎篇に段落評點を附し、總評を加へる等、懇切周到を極め、且その選擇も概して當を得てゐる爲、廣く世に行はれるに至つた。

【會讀】 クワイドク 多人數が寄り集つて同一の書を読みその意味を解釋し論じ合ふこと。

【常居】 ジャウキョ (一)常の住居。(二)うつも。平生。こゝは(二)

【七つ過ぎ】 ナナツスギ こゝでは、午後四時過ぎ。(一)四・見よや春・九九頁一行・七つ時参照

【米舂き】 コメツキ 玄米を搗いて精白すること。「春く」音は「ショウ」訓は「ウスツク・ツク」物を白に

入れて杵で搗く。

【妙を得】 メウをエ 妙技を會得し。大いに上達して。

「妙」は、こゝは言ふに言はれぬ程すぐれてゐること。甚だ巧みなこと。

【上り】 足踏式米搗臺に上つたのをいふ。

【史記】 シキ 黃帝から漢の武帝に至る約二千數百年間の事を記した支那の通史。漢の司馬遷の著。帝王の功業を記した本紀十二卷、諸侯の沿革を記した世家三十卷、主要な人物の事蹟を述べた列傳七十卷、世系・年代を詳にした年表十卷、制度・文物を明かにした書八卷、合計百三十卷からなる。その體制は所謂紀傳體の嚆矢として後世史家の規範をなし、その文章は、漢代散文中の傑作と稱せられてゐる。二千餘年前の古代に於て、かくの如き整備した史書の現れたことは、世界の史學史上に特筆せらるべきことである。

【二十四葉】 二十四枚。「葉」(エフ)は紙などを數へるに用ひる語。枚。ひら。

【精げ畢る】 シラげヲハる 「精ぐ」は、玄米をついて白くする。

【夫より鳥又は米春き、塾生と之を同じくす。米春き大いに其の妙を得、大抵兩三人、同じく上り、會讀しながら春く。史記など二十四葉讀む間に米精げ畢る。亦一快なり】  
「眼中師弟なくして唯朋友あるのみ」といふ師弟關係は、

自ら此の生活態度となつて現れてゐる。これあつてこそ始めて師弟の關係も緊密になり、眞の學問も出來たのである。四十年後猶人をして永懷に堪へざらしむる所以は實にそこに求める事が出来る。

【口羽】 クチバ 口羽徳祐。長州藩士。名は通琦、字は希魏、杷山と號した。安政二年藩命により江戸に遊學し、五年藩の寺社奉行となつたが、翌年八月夭折した。享年二十六。松陰との交通は晩年約一年に過ぎなかつたが、意氣頗る相投するものがあり、松陰は屢々彼を激賞してゐるが、安政五年藩主への「言上書」にも彼を擧用すべきを説いて「學問識見共今世比類稀なる人物」といひ、「留魂録」には、その詩稿を、月性の護國論及び吟稿と共に世に出さんことを同志に寄託したので、後に松下村塾から「杷山遺稿」として出版された。

【糠】 ヌカ 玄米精白に際して、子實・果皮が粉狀化したもの。脂肪炭水化物・蛋白質等を含み、飼料・肥料等に用ひる。

【篩ふ】 フルふ (一)篩で物をふるひ分ける。(二)えり出す。選抜する。こゝは(一)

【再び野山の獄に投ぜられたるの時】

幕府の違勅調印、尊攘派志士斷崖に痛憤した松陰は、藩府の微温的漸進策に慍らず、玉碎的な直接行動を以て事の端緒を打開せんとし、安政五年十月末彈壓の頭目老中

間部詮勝の要撃を企て血盟十七士を得たが、事藩府の知る所となり十二月五日松陰再獄の命が降つた。松陰は時宛も父杉百合之助の病篤きの故を以て入獄の延期を乞ひ十二月二十六日その小康を見るに及んで從容として獄に赴いた。

【福原又四郎】 フクハラマタシラウ 長州藩士。名は利實字は去華、後通稱を又市に改めた。來原良藏の甥で、安政五年松門に入り、間部要撃策にも加り、松陰が再獄されるや、同門の入江杉藏・品川彌次郎等とともに八名結束して藩府に罪名を詰問したので却つて家囚を命ぜられた。生歿年不詳。

【書を與へ、云々】

これより先松陰は獄中から福原又四郎に書を致し、藩主參勤の途次京都の大原三位等が駕を要して討幕の義旗を擧げようといふ所謂「伏見要駕策」の計畫に斡旋するの策を授けた。然るに久坂・高杉をはじめ一門の同志は時期尚早を以て反對し、福原も亦この説を持してその旨松陰に通じた。

本課抄記の書はその「伏見要駕策」に反對したのに對する返書で、「己未文稿」に収録されてゐる。左に抄出する。

復福原又四郎  
承、要駕策、萬期于不成、而僕悍然爲之者、切不得其解焉、嗚呼、諸君衆口一詞、以爲狂策(中略)

爲狂爲愚、吾何憂焉、吾行我志而已(中略)實甫(久坂玄瑞)無窮、松浦松洞輩、今雖叛去矣、嘗一叩之、蓋未忘村塾圍爐徹宵之談也。(中略)諸友之於尊攘、時勢可爲則爲之、不可爲則不爲、其以僕爲狂爲愚、萬々の當矣、僕亦不深尤之也、至于要駕策、長門臣子、實有不忍不爲者、坐視君公入不義、而不以死救之、雖甚不可爲、抑臣子之情哉(下略)

【因循】 インジュン (一)何事にも舊習にのみつき従つて改めぬこと。進歩的精神がなくて舊弊を固守すること。

【尤む】 トガむ せめる。なじる。非難する。

【徹宵】 テツセウ 夜どほし。よもすがら。徹夜。「徹宵の談」は尊皇攘夷について夜を徹して論談しあつたことの意味。

【彼等或は又背き去ると雖も、蓋し村塾爐を圍み、徹宵の談を忘れざるべし】

背き去らんとする弟子に對して、尙無限の信頼をよせて「徹宵の談を忘れざるべし」と斷言して憚らない。共に米を舂き糠をふるつた生活態度を通して到達した師弟關係の結合の深さが思はれる所である。

【嗟呼】 アア (一)歎息のこゑ。(二)感歎のこゑ。こゝは(二)

【寒爐】 カンロ 火の消えた冷たい爐。

【霜雁】 サウガン 霜夜の空を翔け行く雁。

【人静かなる時】 ヒトシヅかなるトキ 世人の寝静まつてひっそりとした夜ふけの時。

【三五の青年】 サンゴのセイネン 三五人の青年。數名の青年。

【團欒】 ダンラン (一)相集つて車座に座を占めること。まどぬ。(二)親密な同志の楽しい集合。うちとけた會合。(三)月などの圓いこと。まろやか。まどか。こゝは(二)

【天下】 テンカ あめが下、宇内の義。(一)世界。萬國。(二)一國。國內。こゝは(二)

【經綸】 ケイリン 國家を治めとのへること。又治國濟民の方策。

【四十年後の今日】 本文の書かれたのは明治二十六年(二五五三年)であり、松陰が村塾を主宰しはじめたのが安政二年(二五二五年)であるから、この間約四十年になる。

【永懷】 エイクワイ ながく思ふこと。ながくおもひしのぶこと。

【況や―於てをや】 イハンヤ―オいてをや まして―に於てはなほさらの事である。

【時勢迫り】 ジセイセマリ 天下の形勢が切迫して來て。

「迫る」はこゝでは、さしせまる。切迫するの意。

【天下動かんとす】 世の中が變動せんとする。世の趨勢が改新變動を來せんとする。

【寵孫】 チョウソン (一)特別に可愛がる孫。(二)時運に乗じて立身出世した人。幸運兒。寵兒。こゝは(二)

【アルプス嶺】 Alps mts(英) イタリア・フランス・スウイス・ドイツ・オーストリアなどの諸國に跨がるヨーロッパの大褶曲山脈。(二)故山の姿・七頁一行既出)

【隆凍】 リユウトウ 「隆寒」(さかんな寒さ)「隆冬」(寒氣の酷しい冬)等から類推した作者の新造語であらう。辭書には見當らない。強い凍み、きびしいひえ、くらの意。

【苦寒】 クカン (一)きびしいさむさ。(二)さむさに苦しむこと。(三)最も寒い時。陰曆十二月の別稱。こゝは(一)

【凌ぐ】 シノぐ こゝは押分けて進み行く。強ひて通る。さからひをかす。

【負載】 フタイ 重荷を負ふこと。苦役すること。「互に負載し」は、互に背負ひ合つて、の意。

【抱擁】 ハウヨウ いだきかゝへること。【自他の體温によりてその呼吸を保たざるべからず】

雪中で凍死の危険が迫る時は、同行者相擁し相互の體温によつて能く生命を保つことが出来るといふ。村塾徒が

【做せ】 ナセ せよ。「做」は「作」の俗字。【彼は其の子弟に向つて我が如く做せといへり。而して做せり】

「我が如く做せ」とは、子弟の爲に、子弟に先んじて道に殉じた松陰の至誠眞情の一語である。「而して做せり」とは、その至誠と恩愛に奮ひ立つた子弟の行動である。

【做せ】といひ、而して「做した」といふ、簡單な敘述の中に松陰の眞面目とその師弟關係が躍如として、よく一文に眼睛を點じ得てゐる。殊に「而して做せり」の一句は、悲壯なひびきを含んで人に迫るものがある。

【徒然】 トゼン 爲すことのなく退屈なさま。つれづれ。無聊。

【萩城の東郊】 ハギジヤウのトウカウ 萩の東方の町はづれ。松下村塾の所在地松本村をさす。

【萩城】は慶長八年毛利輝元が安藝を去つて入國し、翌年こゝの地をトして築城し、山口から移り住んで以來、文久三年敬親が邊陲の故を以て再び山口に移るまで二百六十年間、毛利氏の居城であつた。

【萩】は現萩市。山口縣の日本海に面した都邑で、阿武川の河口に跨がり、毛利氏三十六萬石の城下として殷盛を極め山陰有數の地であつた。幕末毛利氏の山口に移るに及んで一時衰微したが、近時再び隆盛に赴き、山陰本線の全通以來名實共に山口縣北部の中心地となり、昭和

互に相扶け、能く身邊に迫る困難や危険と闘つて、その所信に邁進したさまに比して言つたのである。

【恩愛】 オンアイ(オンナイと發音) (一)めぐみ。いつくしみ。なさをかけること。(二)佛語。恩にひかれて愛著すること。主に親子・夫妻等の間の戀々たる愛情をいふ。こゝは(一)

【陶冶】 タウヤ (一)陶器を焼くことと金屬を鑄ること。(二)陶器師と鑄物師。(三)人才を薰陶すること。人材を育成すること。こゝは(三)

【先生前に斃れて弟子後に奮ふ】 艱難は同情を生じ、同情は恩愛を生じた。その恩愛の至情に立てばこそかくあり得たのであつた。教育は愛の事業である。子弟の爲に子弟に先んじて、國の爲、道のために殉じた松陰の無限の愛こそ、この教育の理想を實現せしめたものである。

【難に殉ぜり】 ナンにジュンゼリ 災難の爲に死んだ。國難の爲に生命を捨てた。「殉ず」は(一)殉死をする。(二)ある物事の爲に生命を投げ出す。こゝは(二)

【懦夫】 ダフ 氣の弱い男。氣節のない男子。意氣地なし。臆病者。「懦」はよわい。勇氣がない。にぶくてよわい。

【素養】 ソヤウ 平素の教養。かねてから學びおぼえてあること。學藝のしたち。

七年市制を布くに至つた。城址は市の西北萩灣内に突出した指月山(志都岐山)にある。

【臺所六疊、座敷八疊】

松陰の講筵に列する者日に加はり、幽室では狹隘を感ずるに至つたので、安政四年十一月杉邸内の廢屋を修補し八疊一室を得、翌五年三月更に十疊半(四疊半一室、三疊二室外に土間一坪)を増築した。「搬土運石、一不煩雇徒」とある如く、皆塾生がこれに任じた。因みに松陰の幽室は、村塾の東なる杉家舊宅(木造平家、八疊三室、六疊三室、四疊一室、三疊一室、四疊半一室)の東南隅の一室(四疊半の中一疊を區切つて杉・吉田兩家の祖神を祀つてある)で、西北土間には米搗場がある。但し米搗臺及び白臼は今屋外に移轉して保存されてゐる。村塾・舊宅共に今縣社松陰神社の境内に屬し、内務省の指定史蹟として、よく舊態を存してゐる。

【矮屋】

ワイヲク 丈の低い家屋。小さい家。小屋。

【洪太尉】

コウタイキ 水滸傳中の一人物。太尉洪信。(下條水滸傳梗概参照)

「太尉」は秦・漢以降の支那の官名。武事を掌り、丞相と等しく尊ばれ、三公(大尉・司徒・司空)の首に置かれた。明以後廢止。

【伏魔殿】

フクマデン (一)惡魔の隠れてゐる所。(二)惡

事や祕密の潜む禍快の根源地。陰謀の巢窟。こゝは(一)(下條水滸傳梗概参照)

【發く】

アバク (一)土を掘り開いて中から物を取り出す。(二)他人の密事を探り出して發表する。こゝは(一)

【妖星】

エウセイ (一)あやしい不吉の星。災厄の兆として現れる星。(二)彗星。こゝは(一)

【洪太尉が伏魔殿を發きて一百八の妖星を走らしめたる】

水滸傳(宋史・宣和遺事等)に見える河朔の寇盜宋江等三十六人の事蹟に基づいて一百八人の豪傑を描出した支那の小説。作者は元の施耐菴、若しくは明の羅貫中等といはれるが明らかでない。の發端をなす物語で、その梗概は左の如くである。

宋の仁宗の時都に疫癘が流行したので、江西信州の龍虎山に住する神通不測の道士嗣漢天師張真人を召して天災を攘ふ秘法(羅天大醮)を行はしめる爲に、太尉洪信を勅使として龍虎山に差遣せられた。太尉は單身登山するが、天師は夙に來意を知つて鶴に駕し雲を凌いで都へ赴く。翌日太尉は、院主・道衆の嚮導によつて山内を觀覽し、「伏魔殿」の額を掲げた別殿を看て、その由来を尋ね、唐の時開山洞玄國師が魔王をこれに封鎖したものである旨を説かれて信ぜず、衆人の諍諫・阻止を排して封皮を除き、鎖を碎き、門を開いて殿内に入る。そして、殿の中央の大石碑の裏面に「遇洪而開」の文字を見て大いに歡び、遂に石碑を掘倒させて下の龜石を除き、土中に青石の蓋を見出し更にこれを排除すると、途端に石下の深穴の中から、萬雷の響

【大立物】

オホダテモノ (一)當時の俳優中、伎倆などの最も勝れたもの。(二)多數の一團の中で最も尊重せられた人。こゝは(二)

【世或は一人を以て興り、世或は一人を以て亡ぶ】

一人よく天下國家を興す者は世界人類の歴史の上に求めても決して多しとしない。而して松陰は正にその一人であり、且その尤なる一人であつた。

【輕視】

ケイシ 輕んじみさげること。

2 文の構成

第一節 初―一六〇頁末行 松陰の偉大な感化力の綜括的概説。

第二節 一六一頁初行―一六三頁四行 松陰と松下村塾の關係、及び村塾の歴史的意義。

第三節 一六三頁五行―一六六頁初行 松陰の情熱的性格とその教育的感化。

第四節 一六六頁二行―一六九頁九行 松陰の實學的教育と、その至誠至愛を傾けた教育の態度。

第五節 一六九頁一〇行―終 松陰の一世に與へた感化影響。

3 文意

松下村塾の近世史の上に於ける重大な意義に立脚して、主宰者松陰の人となり論じた傳記的評論である。彼の性格を説き、學問の傾向を論じ、教育の態度を述べて師弟の關係に及び、その平面的事實の敘述の間に、至誠と愛と情熱とに貫かれた松陰の偉大な人間性を躍如たらしめてゐる。

3 鑑賞批評

僻陬の地に邊在した區々たる松下村塾の存在が、不滅の光輝を放つ所以のものは、その歴史的意義の重大さにあり、而してその然る所以が主宰者吉田松陰の偉大な感化力に存することは、諸人の等しく口にする所で、作者の言説に俟つまでもない。併し作者は更にその偉大な感化力の由つて来る因由に深く洞察検査の心を潜め、その根源を剔抉して餘す所がない。或は性格を説き、或は學問の傾向を述べ、また教育の態度を讃稱し、而もその平面的敘述を通して、至誠と熱情と恩愛とを以て、觸れる者はこれを燃やし接する者はこれを化せず置かなかつた松陰の偉大な人間性の本質を躍如たらしめてゐる。この文の生命と意義とは實にこゝに存するのである。加ふるに、漢文調でたゞみかけて行く雄勁な筆致と、情熱を湛へた潤ひのある文調は、おのづから松陰の心熱を傳へて、常に生き生きとした感動を與へてゐる。誠にこれ松陰に對する尊敬思慕の自然の發露であり、彼にとつて知己の言といふべきであらう。

三 備考

1 指導研究

(一) 明治維新史の上に重大な役割を果した松下村塾の存在に就いては、生徒も既に知る所があらう。その既得知識を整理補説して、こゝに松下村塾の歴史的意義を新しく回顧せしめることは、やがて主宰者松陰の偉大な感化力を實證する事に役立つものであり、松陰の傳記・逸話等に就いての既知知識の整理補説と共に、本課學習の基礎的工作である。

(二) 然し既述の如く、本課の中心がその核心たる松陰その人の評傳である事を忘れてはならない。即ち松下村塾がかくの如き存在たり得た因由の根原である主宰者松陰の人となりの論評である。その偉大な感化力の湧き出た松陰の性格やその教育態度などを深く検討せしめることによつて、偉大な薰化を遺し得た松陰の人間性の本質を見きはめ、偉人松陰に對する敬慕の情を起さしめる所に、終局の目的が置かるべきである。

(三) 松下村塾が近世史上重大な意義を持つ上に、その時代の歴史的背景が與つて力のあつた事はいふまでもない。併しその後半世紀を経て、學校教育が普及發達した今日に於て、新に塾教育の意義が唱導される理由を思ひ合せる時、その根柢は結局人間の力であり、眞實な個人の力に他ならない。本課は正にその事實を如實に教へたものである。至誠と愛と情熱とに貫かれた松陰の生活態度は、時代を越え處を越えて、永遠に人間の社會生活の中に生くべきものである。此の點から推して、單に松陰を歴史上の人物としてのみでなく、生徒にもつと近いものとして讀みとらせて行きたい。

(四) 對偶法・倒置法・反語的敘法等を隨處に驅使し、たゞみかけて行くやうな漢文調の雄勁な筆致は、作者の松陰に對する傾倒の情の發露であり、行句の間自らその熱情が迸つてゐる。文律に隨つて讀みを深め、作者の感動に共鳴共感せしめることは、理解を徹底せしめる上に最も妥當な方法であらう。

2 參考

- (一) 挿繪 吉田松陰肖像  
松浦松洞筆。安政五年松陰藩地より江戸に檣致せらるゝに際し、門人松洞をして畫かしめたもの、自讃がある。
- (二) 挿繪 松下村塾  
「ポストカード」より轉載。
- (三) 松陰筆 士規七則

披三編 冊子、嘉言如林、躍々迫人。願人不讀、即讀不行、苟讀而行、則雖千萬世、不可盡。噫、復何言、雖然有所知矣、不能不言之至情也。古人言、諸古、今我言、諸今、亦詎論焉。作士規七則。

一 凡生爲人、宜知人所異於禽獸。蓋人有五倫。君臣父子爲最大。故人之所爲人、忠孝爲本。

一 凡生爲國、宜知吾所以尊於宇內。蓋皇朝萬葉一統、邦國士夫世襲祿位、人君養民以續祖業、臣民忠君以繼

父志。君臣一體忠孝一致唯吾國爲然。

一 士道莫大於義。義因勇行。勇因義長。

一 士行以質實不欺爲要。以巧詐文過爲恥。光明正大、皆由是出。

一 人不通古今、不師聖賢、則鄙夫而已。讀書尙友君子之事也。

一 成德達材、師恩友益居多焉。故君子慎交游。

一 死而得已四字、言簡而義該。堅忍果決、確乎不可拔者舍是無術也。

右士規七則約爲三端。曰、主志以爲萬事之源、擇交以輔仁義之行、讀書以稽聖賢之訓。士爲有得於此、亦可爲成人矣。

二十一回猛士手錄

(四) 松下村塾の教育の一斑を窺ふべき二三の資料を吉田松陰全集から左に抄出する。

(イ) 松下村塾の教科用書

天下の書、蓋し四大別あり。曰く經・史・子・集。四者に通習して、各其の精を究む、是を博學と謂ふ。博學要を失す、是を雜學と謂ふ。雜學は以て學と爲さず。是に於てか、専門の學も亦廢すべからず。有隣已に村塾に入り、塾生大いに振ふ。十數歳の童儔訓を假らずして文字を讀む者、駸々として輩出す。就中四生あり、二十二史及び資治通鑑を以て各自ら課となし、專修して功を見さんと欲す。一浮屠あり。専ら諸集を脩む。夫れ經は則ち大なり、子は則ち難し。童子の治め易き所に非ず。數年の後史より經に入り、集より子に入る、未だ必ずしも人なきにあらず。吾の待つ所是なり。然りと雖も是れ漢學者流のみ。又二生あり、一は賀茂・本居二先の軌轍に従ひ、古學を講じ古書を讀まむと欲す。一は水滸及び頼氏の流派に派り、國體を明かにし皇道に通ぜむと欲す。是れ益々樂しむべきなり。(詩文拾遺村塾記事抄)(原漢文)

(ロ) 松下村塾の塾風

村塾禮法を寛略にし、規則を擺落するは、以て禽獸夷狄を學ぶに非ず、以て老莊竹林を慕ふに非ず。特に今世禮法未造、流れて虚偽剽薄となれるを以て、誠朴忠實以て之を矯揉せむと欲するのみ。新塾の初めて設けらるゝや(安政四年十一月五日)諸生皆此の道に率ひて相交り、疾病艱難には相扶持し、力役事故には相勞役すること、手足の如く然り、骨肉の如く然り。増塾の役(同五年三月十日)構造略々成る。多くは工匠を煩はさずして乃ち能く成るあり。職として是これに由る。(戊午陶室文稿示諸生抄)(原漢文)

(ハ) 松下村塾策問

恭しく今茲三月廿日の勅諭を捧讀す。天情皇神を畏れ、列聖を重んじ、幕府の黒夷に交通するを恨みたまふ。因て更に幕府に令し三家諸大名をして心を竭して建言せしめたまふ。事已に行下す。思ふに幕命日ならずして吾公に下らむ。吾公の奉答固より當に賢籌あるべし。何ぞ微臣の過愛を待たむ。然れども、事實に國家の安危興替の界となす。凡そ臣子たる者、義宜しく愼然として傍觀すべからず。若し或は下問を辱ふせば、亦まさに何を以てせむとするや。諸君生平書を讀む、志固より皇室に在り。情常に夷虜を愼す。其の嘗て見る所を疏して悉さざることある勿く、以て下問の日を待て。四月十二日。(原漢文)



昭和十四年三月一日印刷  
昭和十四年五月廿三日發行

非賣品

不許複製 能勢朝次

著作權 能勢朝次  
印刷者 東京市神田區美土代町十八番地  
株式會社 文學社  
代表者 小林竹雄

發行所

東京市神田區  
美土代町十八番地 株式會社

文學社

電話 神田三五一番  
振替東京三八七八番

392  
5  
472

終